

令和 4 年 6 月 29 日現在

機関番号：24505

研究種目：挑戦的研究(萌芽)

研究期間：2017～2021

課題番号：17K18486

研究課題名(和文)言語の看取りと看取りの言語

研究課題名(英文)Seeing off endangered languages and selecting a language in deathbed

研究代表者

藤代 節(Fujishiro, Setsu)

神戸市看護大学・看護学部・教授

研究者番号：30249940

交付決定額(研究期間全体):(直接経費) 4,900,000円

研究成果の概要(和文)：言語にまつわる2種の「看取り」について新しい視点を提出することを目指した。「消滅の危機に瀕した言語」(危機言語)を「看取る」プロセスと、自身あるいは他者が身体的精神的に危機にある時に看取る言語行動をまず多角的に観察した。言語を共通項とするものの、一見、直接的には無関係な言語と人の看取りであるが、危機言語は急速に消滅に向かい、話者等による復興をも視野に入れたプロセスが生じる。また、人間の看取りではその環境が多言語であるなしに関わらず、苦痛を悲嘆し、回復を図る行動が生じる。人間の看取りと危機言語消滅の接点は未だ明らかではないが、看取りを鍵に多様な人間言語の生態を浮び上げることができる。

研究成果の学術的意義や社会的意義

メディアの発達やインターネットの発達により、世界の言語使用状況はますます話者数の多い言語に収斂しつつある。そのような状況下で消滅の危機に瀕した言語は文字通り瀕死の状態にあり、今やこれら言語を看取る段階にある。このような言語の看取りのプロセスは、人間が瀕死の状態にある時の看取りといくつかの面でつながりがある。この研究では、人間の死と言語の死に通底する高速で進む消滅への最終段階で生じる延命や復興のプロセスを直視しながら、一方で言語の死と人間の死に際して生じる言語行動の多様性を浮き彫りにした。

研究成果の概要(英文)：This study analyzes two kinds of mitori or "seeing off the extinction of lives": seeing off an endangered language and nursing a person on deathbed. When a language becomes extinct, what process does it go through? When a person is under a severe condition physically, how do they or the people around them respond and in which language, if in multilingual area? By observing these processes concretely from different angles, we found some similarities in both cases. On the one hand, when an endangered language eventually dies, the process accelerates at their last stage. On the other hand, a person on deathbed or around them sometimes tries to express grief or pain with words to encourage them to live. This is similar to speakers of an endangered language trying to keep the language alive. It has not yet been clear the relation of two kind of mitori for an endangered language as well as for a person. However, there may be common features in the ecological aspects of the process.

研究分野：言語学(シベリアの諸言語研究、特にチュルク系諸言語研究)

キーワード：危機言語 看取り 二言語併用 悲嘆 イギリス文学 シベリア D.H.ロレンス 母語

1. 研究開始当初の背景

研究代表者は、主に旧ソ連邦シベリア地域のチュルク系言語、特にヤクート語(話者 45 万人) やドルガン語(話者数は近年までほぼ 5000 人で推移)等を研究対象とし、大言語ロシア語との二言語併用状態にあるこれら言語を特に言語接触の観点から調査研究してきた。社会の変容と人間の移動による言語接触がおこり、言語が形成される一方、ロシア社会主義革命後、20 世紀の大半をソ連邦政権下の大言語ロシア語の受容につれて加速度的に消滅に向かうシベリアの諸言語に共通する様々な言語保持上の困難を観察してきた。言語保持の重要性を強調しつつも、危機言語は記述して残すしかないという一種諦観を抱いての従来の言語研究から、本研究は少し外れ、人間の言語の消滅はどのようにして始まり、どのような道筋を通過していくのか、残念ながら現在のシベリアの諸言語の多くの言語が「看取り」を必要とする段階にあることをふまえ、言語が消滅していく様子を記述すべきという構想に至った。シベリアの言語を例にとれば、ロシア語教育がシベリア地方に浸透し出す 20 世紀半ばまでの記憶を持つ世代、またその次の世代、さらにソビエト政権崩壊から四半世紀が過ぎようとしている現在であれば、連邦崩壊後に教育を受けた世代からの具体的な情報を得ることが出来る。これら社会の言語使用環境を異にする連続的世代への調査は、言語の看取りの記述となる可能性が高い。一方、言語の消滅をつぶさに観察する上で、「生身の」話者個人が二言語以上の使用状況にある場合、その個人を看取る(ケアする)現場の言語のあり方、選択の仕方を観察することで、話者にとっての言語選択の究極と言語使用と人間のコミュニケーションツールとしての言語のあり方についてについて考えたい。このことが母語というものの再認識にも及ぶ可能性がある。

研究開始当初の背景としては、危機言語に大きく焦点を当て、その衰退のプロセスをつぶさに観察すると同時に多言語併用状況下にある言語圏で少数派言語使用者が生命の危機に瀕したおりの本人及びその周辺にある話者の言語選択について観察することは、新たな言語研究上の視点を開拓できるとの期待があった。さらに、それらの言語行動の観察を通して、一見、直接的に関係のない 2 つの看取りに通底する人間の言語行動と言語生態の関連を見いだすことが可能ではないかと考えていた。

2. 研究の目的

本研究課題は言語にまつわる 2 種の「看取り」について研究分野を開発することを目指している。1 種は既に研究対象として注目を集めている「消滅の危機に瀕した言語」(危機言語)について、その消滅を「看取る」プロセスにまつわる「看取り」である。もう 1 種は、多言語使用環境において、人が身体的精神的に危機に瀕した時に行う言語選択のあり方を探るための、現代社会の現実に即した「看取り」の言語を指す。ケアを受ける人が臨床現場等において使用する言語の状況に着目する。言語にまつわるこの 2 種の「看取り」のうち、後者は、使用言語自体が危機言語であるか否かに関わらず、言語選択の場面において話者個人の選択動機が最も強く作用する場面であるとみとめてよいだろう。これに鑑みれば、前者の言語の「看取り」のプロセス、即ち言語はどのようにして使われなくなり、消滅するのかという問いを具体的に解明する糸口を見いだしたい。

3. 研究の方法

(1) この研究は、パイロット的性質を帯びた研究で、当初の 3 年間の研究方法として、概ね北方の危機言語圏にある言語使用の観察と、臨床現場を中心とする身体的精神的に重篤な状態にある人間を看取る、あるいは看取られる人自身の言語行動を多角的に観察することを中心に 3 年間の研究期間を予定していた。当初の研究方法としては、次のように考えていたが、2 年目には、研究分担者に英文学を研究分野とする山内理恵氏を加えた。これは、主に東洋文化圏にある言語を研究対象としている研究代表者が 1 名で調査、観察を主とした研究活動に終始するよりも、西洋文化圏の、特に英文学における悲嘆の研究にも取り組んでいた山内氏を迎えることで、本研究課題の特に人間の看取りについて、より具体的に多角的に研究を深めることができるのではないかと期待したからである。実際に西洋文化圏を研究対象地域とする山内氏が加わったことで、大きく、言語行動と言語生態についての分析が進んだ。

そのような中、研究 3 年目の 2019 年度末から流行の兆しをみせていた Covid-19 感染症ウイルスの流行により、2019 年度末以降、2 ヶ年度にわたり研究方法の大幅な変更を余儀なくされた。以下、当初予定していたとおりに行った研究活動の方法と、延長期間に行った研究方法を記す。

(2) 初年度は、パイロット調査の対象として、もっぱら代表者が研究対象としてきたチュルク系小言語(シベリア地方北極圏)ドルガン語を扱った。調査に際しては、特に 60 代以上のドルガン語話者である人々の協力を得、母語以外の大言語(ロシア語)の使用について、言語コミュニティを取り巻く社会的背景、経済状況、教育制度、マスコミの使用言語などの変遷にも注目し

て、調査した。その際には従来の危機言語調査とはやや異なり、ドルガン語と、実質的には、家庭内を除けば日常生活の多くの場面で使用しているロシア語について、詳しく使用場面についてのインタビューを試みた。かつ、特に医療現場など、自らに身体的あるいは精神的不調がある場面で使用する言語、あるいは使用を望む言語について、調査する。母語教育の成立の背景の推移とともに若年層あるいは更に上の高齡の世代についても可能な限り調査を行う。

研究分担者の主な研究フィールドであるシベリア地域に限らず、二言語併用が一般的にみられる中央アジアなどを含むロシア語圏、新疆ウイグル自治区を含む中国語圏、日本国内の言語的少数者の言語等について、言語の看取りという点と(広義に)看取りの場面での言語使用についてのパイロット調査の計画を研究協力者等と練る。

2017年秋以降:パイロット調査として、研究代表者がロシア国サンクトペテルブルグに赴き、ロシア教育大学北方諸民族研究所にて、ロシア側の研究協力者等と研究計画を確認する。医療現場をも含む言語使用状況調査に協力可能なインフォーマントの紹介を受け、部分的にはパイロット的調査を依頼する。研究協力者等からの言語情報調査はこの時期に行う。

看取りの現場での言語使用については、さらに国内の医療通訳者等のレクチャーを受け、次年度以降の調査について、計画を精査する。

(3) 2年次となる平成30年には、主に前年度のパイロット調査結果を基に、更に言語の看取りについて、ターゲットを広げて調査を行いつつ、言語が消滅して行くプロセスについて、地域あるいは各言語の置かれた事情に共通の要素の抽出を試みる。

前年度のパイロット調査を受け、言語の看取りについての調査対象を広げて観察対象を西洋文化圏、東洋文化圏の両方を扱う努力をする。

この年度には、国外研究協力者・タイムル北方諸民族協会(ロシア国クラスノヤルスク地方タイムル県ドゥジンカ市)所属のA.A.バルポーリナ氏(主任研究員、ドルガン語話者)他(極北圏のドゥジンカ市より、ドルガン人研究者2名、エネツ人研究者1名)を神戸に招聘し、研究討議と言語調査を集中的に行う。言語使用の調査については、積極的に国内外の研究者等と協力して行った。他大学の他の科研費プロジェクトとの共催によるシンポジウムなども開催した。

なお、2年次から、英文学を研究分野とし、特にD.H.ロレンス、ブロンテ姉妹の作品研究に取り組む山内理恵氏が研究分担者に加わり、英文学作品などに現れる西洋文化圏の悲嘆表現研究から瀕死の人間をめぐる言語行動についての観察分析における多角的アプローチをとることにした。

(4) 3年次の2019年度は、最終年度であるので、前半には、先行する約2年弱の調査結果の補充調査を行いつつ、分析を続行する。国内外の研究協力者とともにディスカッションを重ね、本研究課題が目指した2種の「看取り」の解明について総合的分析を施したい。危機言語の「看取り」については、個別言語毎の記述と合わせて、通言語的事象についても分析し、言語消滅のメカニズムの解明を試みる。最終的な研究結果は、いずれも紙媒体での公表(Contribution to the Studies of Eurasian Languages series 第23巻を予定)と合わせて、これまでで科研費による研究プロジェクトのウェブページとして運営しているユーラシア言語研究コンソーシアムHP(<http://www/tr.kobe-ccn.ac.jp/~CSESL>)にて、和文及び英文で発表する。

最終年度には、他大学科研費プロジェクトとも共催にて言語の看取りと看取りの言語をテーマにしたシンポジウムを開催する。そのため、2019年度には、ロシア国立ロシア教育大学北方諸民族研究所(サンクトペテルブルグ市)所属のA.A.ペトロフ氏(アルタイ諸言語講座教授、ヤクート語話者)、L. Zh. ザクソール氏(同講座准教授、ナナイ語話者)並びに医師でもあるO.M. ペトロワ氏(サンクトペテルブルグ市民病院勤務、ヤクート語話者)の参加を得て、ワークショップも開催し、少数民族言語と大言語ロシア語との使用状況の情報収集、協議を行う。

(5) 4年次~終了年次(2020年度~2021年度)の研究方法について

既述のように2019年度末から急激に危険を増したCovid-19感染症の流行により、前年までのパイロット調査の補充などが難しくなり、また、当初の最終年度にロシア国その他の地域の参加者の協力をも得て作成するはずであった成果論集の出版が大きく遅れた。その間、渡航しての調査はできず、また、招聘も難しく、さらには海外との郵便物のやりとりにも支障を来した。幸い、文献による調査は比較的スムーズに継続出来たため、研究方法を国内で可能な活動に変更しつつ、前年度までに収集した言語情報や言語データの分析整理に取り組み、かつ、文学作品などの対面でなくとも利用出来る言語行動の分析に臨んだ。

なお、2021年度初秋には、日本国内の危機言語とみなされているアイヌ語について、言語生態の面から言語復興を視野に入れた講演を基調に据えたシンポジウムを開催し、合わせて二言語併用の実態や言語文化の多様性に関わる諸問題について討議した。このシンポジウム報告を含む成果論集の編集出版を予定している。

4. 研究成果

本研究課題における研究成果を年度毎に示す。

(1) 2017年度

まず、既に消滅に瀕している(看取り段階にある)言語の使用についてパイロット的調査を行

うことにした。11月末～12月初めの極短期間ではあったが、ロシア国クラスノヤルスク地方北部のタイムル県ドゥジンカ市内にて、ドルガン語、ネネツ語、エネツ語、ガナサン語話者等に、各言語の使用状況や次世代への言語継承の難しさについて調査を行った。

ソビエト政権下でも、サモエド系のエネツ語、ガナサン語については、既に看取りの段階にあったとも言え、ソビエト連邦崩壊後も依然として話者数は低いままである。一方、チュルク系の言語であるドルガン語の話者の減少は連邦崩壊後のおよそ四半世紀の間に著しい。帝政ロシア時代には比較的産業上も行政上も関係の深かったサハ(ヤクート)語圏とともに、ソビエト政権時代も言語保持率が8割を越えていたドルガン語であるが、ソビエト政権崩壊後の今日、言語保持の状況は衰退の一途であった。今回の調査で、特に伝統産業であるトナカイ飼育の産業形態崩壊による生活様式の変化と集落からの、特に若い世代の人口移動が、筆者の予想以上に言語保持に影響を及ぼしていることが分かった。この調査結果については、ユーラシア言語研究コンソーシアム2017年度年次総会(2018年3月29日、京都)で、「ロシア極北タイムル州の先住民族言語使用状況レポート」として発表した。また、代表者が主に研究対象としているロシア語圏に分布するチュルク系言語の他にスペイン語圏に分布する少数派言語のバスク語や中国語圏に分布する蒙古系小言語についての研究協力者の発表を含め、少数派言語の使用状況について検討する機会を持った。

(2) 2018年度

年度当初に、研究分担者としてイギリス文学を研究領域とする山内を加えた。主に藤代が取り組む「言語の看取り」に対して、「看取りの言語」の部分を手内が担当することで、本研究課題が掲げる2つの「看取り」について、前年度に増して、より深い分析と考察を進める態勢を整えることができた。

藤代は、北方シベリア域の消滅の危機に瀕した言語の使用実態について前年度に現地(ロシア国クラスノヤルスク地方タイムル県ドゥジンカ市)で調査対象としたドルガン語(話者1000人程度)、エネツ語(話者300名未満)の使用状況の情報を整理した。また、来日したこれら小言語の話者等から語彙の変遷について学術討議の機会を持つことができた。

山内は、主に文学研究の立場から「母語以外の言語で看取られること」の難しさ、また、文化や言語が共有されても互いの価値観などにズレがあり異文化・他

言語の壁を乗り越えて気持ちを通じ合わせることの難しさについて考察を深め、特にブロンテ姉妹ならびにD.H.ロレンスの著作研究を軸におきながら、広く人間

の「死」に直面して生じる人間の表現活動に着目した。また、山内は、年度末に英国にてFlorence Nightingale Museum, The Old Operating Theatre Museum, Freud Museum Londonの三カ所を訪れ、18世紀から20世紀初頭にかけての臨床の現場についての情報を収集し、医療の場にみる死と文学に描かれる死について比較しつつ、死に瀕した人間の普遍的感情と個別的感情のあり方について分析を進めた。

(3) 2019年度

本研究課題は、言語の看取り、即ち、危機言語が消滅に至る過程でどのようなことが具体的に生じるのかについて、研究代表者が主に研究対象としてきた北方アジア、特に極北シベリアのチュルク系小言語のドルガン語使用の環境においてまず観察に入ることから始めた。当初1名でパイロット的な研究として着手し、「言語の看取り」にまつわる研究と並行して、「看取りの言語」にまつわる研究、即ち、人間が身体的に危機的状況に陥った際に選択する言語表現、また、その言語使用について、観察を行う予定であった。幸い、2年目に分担者として山内理恵(英文学)が加わり、対象とする地域及び事象を拡大することができた。山内は、危機的状況における人間の言語行動について古今の文学作品に「悲嘆」をキーワードに材を取り研究を深化させた。

最終年度の今年度は、藤代と山内がそれぞれに行った研究をまずは学会発表、さらには、論文として公開、結実させる一方、「言語の看取り」と「看取りの言語」に通底する、文化の文脈は異なるうとも人間が生老病死に際して選択する言語行動はどのようなものであるかをより明らかにするための研究に取り組んだ。また、その一環として、北方言語研究者やロシアの医療現場で働く医師をロシアから招聘し、ワークショップ「生老病死とシベリアの言語文化 ロシア、サハ・ヤクーチヤ、アムール沿岸域、日本」を神戸と釧路で2月に開催し、バイリンガルが常態である危機言語圏での諸問題及び具体的な医療現場の状況などの知見を得ることが出来た。

(4) 2020年度

本研究課題は、2019年度が最終年度で3カ年の研究を終える予定であったが、2020年2月以降、徐々に活動を制約する新型コロナウイルス感染症予防のために、2019年度の研究活動を全て終わることが出来なかったのを受け、藤代は、2020年度当初には速やかに前年度までに原稿(見本版は2019年度に作成)をとりまとめていた言語学関連の研究成果の紙媒体による公開(CSEL21号)を行い、山内はイギリス文学にみる臨床での悲嘆や人間が死に対して抱く恐怖を

巡る論文を学会誌等で出版した。また、それぞれ、いくつかのオンラインを利用した研究発表も行った。

折からのコロナ禍で益々重要となる言語と医療の接点に立つ本研究課題は、看取りのみでなく復興を視野にいたした研究につなげていく。後継となる研究について、本来であれば、2020年度に繰り越された補助金を用いて、さらにこの研究に関与する情報収集につとめる予定であったが、コロナ禍のため、その点は叶わず、2021年度前半に持ち越されることになった。

(5) 2021年度

本研究課題は、Covid-19流行のため2年間の研究期間延長があったが、2021年度、概ね研究内容を終えた。今年度は感染症拡大期の間隙を縫って、関連の科研費プロジェクトと共催でシンポジウム「言語・人間・文化の「生態」生老病死のその先へ」(札幌市内、11月27日)を開催した。本研究課題の核心にせまるシンポジウムとなった。特に既に日常の言語使用としては危機的狀態にあり、復興を考える段階にあるアイヌ語の研究者に基調講演を依頼し、これに合わせて国内外の危機言語の現在の状況のみならず、二言語使用や言語文化が人間に及ぼす諸相について、活発な議論が交わされた。藤代はシンポジウム全体の企画を行い、山内はオンラインにて、特に西洋文化圏において古語の果たす役割を指摘するなど、ディスカッションに活発に参加した。

今年度は、研究代表者の藤代は主にシベリアの少数民族言語の看取りを見据えた言語生態について国際学会(オンライン)を含む研究会などで発表を行い、研究分担者の山内は、引き続き、D. H. ロレンスとエミリ・ブロンテが共有する死への恐怖について研究を進めた。一例を挙げれば、ブロンテの『嵐が丘』とロレンスの『カンガルー』に見られる「死の床にある登場人物の言動」を再度取り上げてその酷似していることを分析した。また、ブロンテが『嵐が丘』で多くの登場人物を「肉体的に殺す」一方で、ロレンスは『カンガルー』や“Jimmy and the Desperate Woman”などの作品でむしろ「生きながらの(つまり、精神的な)死を描く」点に着目し、ブロンテとロレンスの両者が死を意識しつつも、作品における表現方法が異なることを考察した。

本研究課題はパイロット的な性質をもつ研究であったが、上記のシンポジウム報告を含め、来年度を目処に研究成果を論文などの形で公開していく予定である。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計8件（うち査読付論文 6件/うち国際共著 1件/うちオープンアクセス 4件）

1. 著者名 Yamanouchi Rie	4. 巻 45(4)
2. 論文標題 The Treatment of Grief in Wuthering Heights	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 The Bronte Studies	6. 最初と最後の頁 360-373
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1080/14748932.2020.1794637	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 山内理恵	4. 巻 101
2. 論文標題 研究ノート：タイトル「エミリ・ブロンテにとっての自然」	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Bronte Newsletter of Japan	6. 最初と最後の頁 3
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Yamanouchi Rie	4. 巻 34
2. 論文標題 Love of Nature and Fear of Death in the Works of Emily Bronte and D. H. Lawrence	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 国際文化学	6. 最初と最後の頁 117-141
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.24546/81012644	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 藤代節	4. 巻 21
2. 論文標題 P.F.ボリャージン『ヤクート語ロシア語辞書』（1877年）より：「序」（和訳）、「使用の手引き最重要事項」（原文テキストと和訳）	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 Contribution to the Studies of Eurasian Languages	6. 最初と最後の頁 215-230
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 山内理恵	4. 巻 0
2. 論文標題 『カンガルー』に見られる『嵐が丘』の要素 個と社会の葛藤を描く	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 『めぐりあうテキストたち』 春風社	6. 最初と最後の頁 195 211
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Rie Yamanouchi	4. 巻 33
2. 論文標題 D. H. Lawrence and Feminism	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 国際文化学	6. 最初と最後の頁 160 179
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 Setsu Fujishiro	4. 巻 20
2. 論文標題 A note on r and l in Dolgan and Yakut	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 Contribution to the Studies of Eurasian Languages	6. 最初と最後の頁 95-103
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 Setsu Fujishiro	4. 巻 0
2. 論文標題 A Song of Marriage and Setting up a House. A Proto-Dolgan Song Recorded by K. M. Rychkov,	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 Essays in the History of Languages and Linguistics, (eds.) M.Nemeth, B. Podolak, M. Urban, Krakow, Poland,	6. 最初と最後の頁 203-217
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

〔学会発表〕 計11件（うち招待講演 3件 / うち国際学会 4件）

1. 発表者名 (Alexandr Petrov), (Setsu Fujishiro)
2. 発表標題 - (XX - XXI .) -
3. 学会等名 II " (国際学会) "
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 藤代 節
2. 発表標題 ドルガン語の悲しみの表現
3. 学会等名 2020年度ユーラシア言語研究コンソーシアム年次総会「ユーラシア言語研究 最新の報告」
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 山内理恵
2. 発表標題 エミリ・ブロンテとD. H. ロレンスをつなぐ自然愛
3. 学会等名 神戸女学院大学英語英文学会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 Setsu Fujishiro
2. 発表標題 Proling Dolgan before its standardization
3. 学会等名 (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Rie Yamanouchi
2. 発表標題 "What D. H. Lawrence 'Steals' from Wuthering Heights--Romantic Fantasies Inherited in Kangaroo
3. 学会等名 The British Association of Romantic Studies 第16回大会, Nottingham, UK (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 藤代 節
2. 発表標題 環境が変われば語彙はどう変わるか? - Porjadin P. のヤクート語辞典 (1877年) とRychkov K. のドルガン語彙 -
3. 学会等名 ユーラシア言語研究コンソーシアム年次総会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 藤代 節
2. 発表標題 ロシア極北タイムル州の先住民族言語使用状況レポート
3. 学会等名 2017年度ユーラシア言語研究コンソーシアム年次総会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Setsu Fujishiro
2. 発表標題 A General Survey of Yakuts/Dolgans and their Language(s)
3. 学会等名 中国中央民族大学 (北京) (招待講演)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 藤代節
2. 発表標題 1世紀前の北方言語資料を如何に利用すべきか K.M.ルチコフ編纂トゥルハンスク北部域のドルガン語-ロシア語カード辞書をめぐって
3. 学会等名 中国中央民族大学（北京）（招待講演）
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 (Setsu Fujishiro)
2. 発表標題 究の要) (A. A. ポポフ - 過去と現在を繋ぐドルガン研
3. 学会等名 115- (国際学会)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 藤代節
2. 発表標題 セミナー「フィールド言語学の方法論：ヤクート語/ドルガン語の例」
3. 学会等名 中国中央民族大学，北京（招待講演）
4. 発表年 2017年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 藤代節（分担執筆）	4. 発行年 2018年
2. 出版社 勉誠出版	5. 総ページ数 272（執筆部分175-192）
3. 書名 アジアとしてのシベリア（永山ゆかり、吉田睦編）	

〔産業財産権〕

〔その他〕

ユーラシア言語研究コンソーシアム
<http://el.kobe-ccn.ac.jp/csel/>

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	山内 理恵 (Yamanouchi Rie) (00368507)	神戸市看護大学・看護学部・教授 (24505)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計3件

国際研究集会 Overcoming Health Difficulties in Life through Siberian Traditional Culture and Language - in Russia, Sakha-Yakutia, Amur region and Japan -	開催年 2020年～2020年
国際研究集会 4th International Symposium on Northern Languages and Cultures "Siberian Languages: Research and Education"	開催年 2020年～2020年
国際研究集会 生老病死とシベリアの言語文化	開催年 2020年～2020年

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関			
ロシア連邦				
ロシア連邦				
中国	中国中央民族大学			